

氏 名 (本 籍)	ふじ おか くみ こ 藤 岡 久美子 (茨 城 県)
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1595 号
学位授与年月日	平成 12 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	心理学研究科
学 位 論 文 題 目	動作系列の習得過程
主 査	筑波大学教授 教育学博士 杉 原 一 昭
副 査	筑波大学教授 教育学博士 海 保 博 之
副 査	筑波大学教授 教育学博士 太 田 信 夫
副 査	筑波大学助教授 博士 (体育科学) 朝 岡 正 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

序論において、運動事象の学習・記憶研究を概観した。先行研究が運動の学習において身体的側面と認知的側面の関係を問うようなアプローチをとっていないという問題点を指摘し、本研究では、視覚的に提示される系列的な動作の修得を習材に、運動の学習における身体的側面と認知的側面の関係の様相を明らかにしようとした。

研究 1 から研究 4 では、動作系列 (ダンス、バレエ) の習得の基礎的過程を、課題に対して先行経験のない被験者を対象に明らかにした。研究 1 ～ 3 の行動の分析を通じて、動きを伴わない静的な「観察」と観察を伴わない「動作」が比較的多い段階的・部分完成的な習得過程と、一貫して「模倣」(観察しながら動く)を行う非段階的・全体精緻化型の習得過程が見出された。内省の分析及び研究 4 の学習中の発話の分析によってそれぞれの内的過程が検討され、一方は思考過程を介在した習得過程、他方はそれほど思考過程を介在しない身体優位な習得過程とである解釈された。

研究 5 で課題の作成と性質の検討を行ったのち、研究 6 から 10 では課題を繰り返すことによる習得過程の変化を検討した。試行の繰り返しによる全体的変化として学習所要時間と困難感の減少及び身体の反応性の向上が示された。身体優位習得と思考的習得それぞれの習得過程の変化としては、試行を繰り返しても行動面の習得タイプの差はなくならなかったが、発話の分析による内的側面の変化の検討の結果、思考的習得群における思考過程の関与の縮小と身体優位習得群における動きの流れへの同調傾向の増加が示唆された。また 2 つの習得タイプの課題達成における優位性について検討したところ、動作の規則性の獲得は思考的習得群において向上が示された。また、流暢性については、初期の試行で示されていた習得タイプの差が、思考的習得群における向上によって消失していったが、類似性の低い困難課題では再び習得タイプ差が示されていた。結論として、思考の繰り返しによる習得過程の変化としては、2 つの習得タイプは 1 つに収束したり、また、一方が他方に似てくるのではなく、別々の変化をたどることが明らかになった。すなわち、思考的習得タイプにおいては、類似した材料による習得試行を繰り返すことによって材料に共通の規則性が獲得され、その分だけ思考過程の関与が減少し、遂行の流暢性が向上する。身体優位習得タイプでは、モデルの動作に自分の動作を同調させることによって習得する傾向が、試行が進むにしたがってますます増加したと考えられる。このことは、認知面と身体面の関係の点では、どちらが主であるかにつれては変化していないことを示唆している。すなわち、本論文における学習事態では、学習の初期において身体優位になされるか、思考先行でなされるかの習得のタイプは、学習が進行してもその本質的な

傾向は変化していなかった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、運動系列の学習には2タイプあることを明らかにした。一つは身体優位取得タイプで、もう一つは思考介在習得タイプである。そして、それぞれのタイプの習得過程および繰り返しの効果の特色を明らかにしたものである。

スキル未習得のときどのような方略があるかとか、児童・生徒ではどうかなど、未解決の問題が残されているが、ダンスという運動系列の学習過程を身体運動面と認知面の両者から捉えている点は高く評価できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。